

## イスラーム・ジェンダー学までの道

長 沢 栄 治

19年間務めた特殊法人アジア経済研究所（以下、「アジ研」と略）を退職し、23年前に現在の職場に移った。思い出すのは、それを伝えたところエジプトの第一の友人といえる M 君が大学への転職について心配して声をかけてくれたことである。その M 君は現在、同国の高級紙の編集長補佐（デスク）のポストにあって忙しく、カイロを訪れてもなかなか会う機会がない。M 君とは彼が地方の大学生だった頃からの長い付き合いになる。農村調査の真似事を手伝ってもらったのがきっかけだった。その頃、二日に一度は呼ばれていた県警本部での幹部将校とのやり取り（尋問）を M 君は傍らで面白そうに聞いていた。寒村とも言える彼の村にも何回か訪れた。初めて案内されて村に入ったとき、外国人の男が来たというので、路地にいた女性たちが、音を立てて黒衣をひらめかせながら瞬く間に消えていなくなったのは強烈な記憶として残っている。

M 君は父親を早くに亡くしており、大学進学には親戚から支援を受けていたようである。その家の中には書物の影さえない様子に見えた。しかし今や、彼は故郷の村を題材に取った二冊の小説を著すほどの文筆力の持主である。M 君からは、大学卒業後に仕事に就けなかった頃の鬱屈や、カイロに上京後に一目惚れした名家の令嬢との別れ話を聞き、またその彼女とようやく結ばれた後には、子育てについても相談を受けたこともあった。

こうした長い付き合いのある M 君から温かい気遣いの言葉を聞いて、驚くと同時に嬉しくも感じた。もちろん、彼は日本の社会について詳しくは知るはずがなかっただろうし、またその社会の中でどのような身の処し方をすべきか、これまで私が胸の内で考えていたことなど語ったことはなかったからだ。決して他人の悪口を言わない男だと感心していたが、そのときあらためてその人物の偉さが分かったような気がした。

学生時代からよく通った「道草」というおでん屋が農学部の前路地裏にあった。店主のおばさんの名前は憶えていないが（九州の某国立大学の先生が酔っぱらってであろう、店の中の柱かどこかに墨の筆で書いた彼女の名前を見たことがある）、戦後早々に開いたという店の名前の由来は訊いたことがある。本郷通りに何軒かある店と同じく、夏目漱石の小説に由来するのかと思っていた私に対し、彼女曰く「あたしはあんな暗い話は好きではない」とのこと。「人生は道草みたいなものだと考えているから」という説明

だった。「道草」に通ったのは、おそらく戦争で夫を失い、小さな店を切り盛りしながらお子さんたちを育ててきたお婆さんの、人生を達観したような風情に惹かれたからだと思ふ。アジ研の海外調査員としてエジプトに赴く前、あいさつに行くと、「前にインドにヒッピー旅行に行った学生さんにも頼んだことがあるけど、あんたも葉書を送って頂戴ね」と言われた。約束通り、たしかにカイロから絵葉書を送ったのだが、帰国するともう「道草」の店は閉じられていた。

誰でも思うように生きられるわけではないのは分かっていたが、その後、私もなかなか「道草」で思い望んだような人生を送るわけにもいかなかった。

定年退職が近づくとつれ、経済学部で3年生だった頃、他学部の学生にも演習授業を開いてくださった文学部の故田中正俊先生が話されたことを思い出すようになった。田中先生の中国経済史の演習授業でよく覚えているのは、当時の大家ともいえる研究者の著作を名指しで挙げて「老醜ですね」と言われたことだ。現在、文字通りに往生際悪く、これまで書き散らした論考を集めて本の出版を用意しているところであるが、この言葉を思い出してしまう。しかし、この「老醜」は自身の姿のように鏡に映して分かるものでもないで、このまま諦めて世に問うしかない。

もうひとつ印象に残っているのは「学者が論争を始めたら最後まで自説を曲げないことです」（「間違っていると分かっている」とはおっしゃらなかったように思うが）というお話であった。これには異論を唱える人もいるかもしれない。しかし、それは真剣な論争を通じた学問の発展を信じ、矜持を持って生きる研究者のひとつの姿ではないかと思う。

大学に移り、大学院（総合文化研究科地域文化研究専攻）で、そしてしばらくして学部（教養学部後期課程「日本・アジア研究コース」[旧アジア科]）でも演習授業を担当することになった。これまで同専攻の先生方や専攻事務の職員の方々には大変にお世話になった。御礼を申し上げたい。しかし、上述の故田中先生のような時を超えて残る言葉を、授業に参加した学生さんたちに伝えることができたかどうかについては自信がない。ただ、繰り返しよく話したのは「やりたい研究よりは、できる研究を」という助言だった。無理をしないで無難に論文をまとめてほしい（あまりこちらに苦勞をかけないでほしい）という希望からであった。しかし同時に、本当に何を「やりたい」と思っているのかについて実は本人が——その心の内面において——分かっていないことが多いのではないかと考えるからでもある。そして「できる研究」がある程度進んだら、「やりたい」研究だけではなく「やるべき」研究をする時期が来る、という助言もそれに続けた。3年前の2015年度から「イスラーム・ジェンダー学」という科研のプロジェクトを始めたが、それもそのような思いからであった。「イスラーム学」にはほとんど浅薄な知識しか

なく、「ジェンダー研究」にも素人同然であるのに、馬力のある（とくに女性の）中堅・若手の研究者たちに引っ張られながら研究プロジェクトを進めている。

さて、同じ大学3年の秋、出版されたばかりのブライアン・ターナー著の『ウェーバーとイスラーム』という英語の本の翻訳を試みたことがあった（ゼミの指導教員の肥前榮一先生の紹介による）。朝から晩まで机に向かい、一日で何ページを訳せるのか、将来、研究者としてやっていけるかを試してみたのだと思う。しかし、訳し終わった後、ウェーバーもイスラームも嫌いになった。同じ頃、同書の理解にあたって参考になるミッツマン『鉄の檻——マックス・ウェーバー・一つの間劇』が翻訳されたので読んでみた。この本が示す研究者の個人史と研究史との相関を検討することは、地域研究においても重要な方法論的視角である、と今は思う。ただし、ターナーの本もそうだが、その精神分析的な手法には生理的についていけない感じがした。しかし、振り返って考えてみるなら『ウェーバーとイスラーム』を訳し終えたときに感じた「気持ちの悪さ」とは、E・サイードが『オリエンタリズム』で告発したような、イスラームの描き方、とくに性の問題を交えたその醜怪さに由来するものであったと思う（ターナーもその後、サイードの本と同年の1978年に『マルクス主義とオリエンタリズムの終焉』[邦訳題名『イスラム社会学とマルキシズム』]を出版している）。

しかし、人生とは分からないものである。その後、一念発起して中国研究を目指して就職したアジ研では中東研究を命じられ、それに従った第一次石油危機からまだそれほど年月も経っていなかった時期のことである。アジ研の就職について相談に行ったのは、大学2年生の頃、駒場の中国語のクラスに非常勤講師で来られた当時アジ研の矢吹晋先生（その後、横浜市立大学）であり、親切にいただいた。ただし、なぜアジ研が当時、数年にわたり中国研究の新卒を採用しなかったのか、その事情を推察するには、それからしばらく時間がかかった。

とはいえ、アジ研に入所した最初の数年は、おそらく人生で一番に気の安まる落ち着いた時期であった。奴田原睦明先生（東京外国語大学）からアラビア語の個人授業を受ける贅沢な日々であった。レッスンが終ると、最初の頃は池袋駅北口の中華料理屋で豚足など、その後は東上線志木駅にあった先生のご自宅で毎回、奥様の絶妙の手料理をごちそうになった。先生の授業の最後のテキストは、ユーセフ・イドリースの『ハラーム[禁忌]』で、これは難しかった。しかし、この小説はその後の研究者人生に決定的な意味を持つことになる。小説は、女の出稼ぎ労働者（タラーヒール）の不義（ハラーム）の子をめぐる農場村（イズバ）の群像劇を通じて、性と結びついた人間の尊厳を問うていた。しかし、当時の私の関心は、まだ社会経済史的な視野の範囲に限られていた。

客観的に考えてみるならば、大学卒業後「食べるために」研究の道に進んだ私は、当

時の「国策」(が果たしてあったか? という疑問は残るが)の一環としてアラビストに仕立て上げられたわけであった。また、その次の現在の勤務先も国立大学であるから、いわばこれまで40年以上にもわたり国民の税金で好きな研究を続けさせてもらったことになる。よく思い出すのは、アジ研にいた当時、基礎研究の重要性や政策研究との関係をめぐり、同僚・先輩諸氏が委員会を組織して喧々諤々の議論をしていたことである。

そうこうしているうちに最近になって、とくに切実に思うのは専門家の社会的責任という問題である。それを強く感じたのは、数年前にチェルノブイリと福島原発事故をめぐるシンポジウムに参加した時のことである。たしかに、もちろん私を含め普通の人にとっては、ミリシーベルトの数値を示されてもその意味が分からず、原発の安全性については専門家の意見に従うしかない。これと同じことが中東やイスラームをめぐる事象の分析にも言えるのではないか、ということであった。そして原子力の問題と同様に、自らの専門領域についても往々にして残念な状況が見られることも確かである。前述の「イスラーム・ジェンダー学」とは、そうした専門家の責任を果たす知的な試みとして企図されたが、それゆえにこそ同時に広く社会に開かれたものでなくてはならないとも考えている。これからしばらくは「牛に引かれて善光寺参り」のように、遅しく頼りがいのある彼女・彼氏たちに引きずられながら研究を続けていくことになるだろう。